

特別 Column③

英語等の外国語を使ったキャリア

1 英 語

日本企業であってもそれがグローバル企業化しているところが増えており、海外子会社とのやり取りは英語で行うことが多い。また、日本の外資系企業で働く場合、既に日本企業化している企業であれば業務において利用される言語は日本語が中心となる。しかし、それでも、外資系企業は本社（ヘッドクォーター）やアジア統括拠点が日本以外にあり、そこが親会社等であることから、重要事項を報告したり、承認を取ったりする必要がある可能性が高い。だからこそ、社会がグローバル化することによって、外国で働く場合はもちろん、日本において働く場合にも、英語が重要になっている。

もし、将来的にも日本語だけで働くという場合には、そのような言語の制約から、将来のキャリアの可能性が狭まるリスクがある。そこで、英語を利用して働くことも検討すべきである。

もちろん、英語を利用して働くためには日常会話としての英語力ではなく、ビジネス英語の能力が必要となる。例えば、幼少期に英語圏の国・地域に滞在経験があることで、英語はペラペラだ、

という人であっても、その英語がビジネスで使えるレベルの英語とは限らない。そこで、自分が英語を使ってビジネスを行う上で、そもそも前提となる一般的英語力をつける必要があればそれを習得し、また、一般的な英語力はあるが、ビジネスに対応していないということであればビジネスに対応した英語能力を習得する必要がある。

2 中国語

例えば英米以外のヨーロッパ系外資系企業の日本法人でドイツ語やフランス語が使われるかということ、必ずしもそうではない。通常はグローバルの共通言語である、英語が利用される。筆者は、大学時代に多少ドイツ語を勉強したものの、ビジネスではドイツ企業も英語を利用している。つまり、プライベートで仲良くなる部分を除くと、英語でビジネスは足りることが多い。そこで、社会人になってからは外国語としては英語を中心に利用しており、英語以外の言語はほぼビジネスでは利用しておらず、また、ビジネスの目的で新しい言語の勉強はしていなかった。

しかし現状（2024年時点）において、中国の大企業の意味決定権者は英語ができないことが多いと言える。その結果として、英語のできる若い担当者だけと話しても、その担当者が自分の上司である（英語のできない）意思決定権者に対して的確に説明を行い、上司を説得できるかが課題となる。筆者は、弁護士登録直後から中国法務を行っていたものの、このような状況を踏まえ、中国語ができるようになれば直接意思決定権者と話すことができるようになるので中国法務を行う上で有利になると考え、弁護士登

録の約5年後に中国に留学した。しかし、この状況は、若い、英語のできる世代が意思決定権者になる時代が到来すれば変わるかもしれない。

3 「中身」の問題

いずれにせよ、外国語を利用してコミュニケーションを取ることができるということは、外国語を利用してキャリアを構築する上でのいわば最低ラインに過ぎない。この点は「もし、日本語ができるというだけで仕事ができるなら、日本の大学生は全員が『即戦力』ということになる」と言い換えると、その趣旨が理解しやすくなるのではなからうか。要するに、ビジネスレベルの言語能力というのは、仕事をする上での大前提に過ぎず、その語学力を生かして何を話すか、という話の中身が最も重要である。

例えば、法律の専門知識というのはここでいう「中身」の典型例であるが、それ以外にも、相手の話を辛抱強く聞いて相互に折り合いがつく点を探る交渉力、自社のプロダクト（例えば IT サービス）と顧客のニーズとをすり合わせ、適切な提案をして案件を獲得する営業力等、様々なものが「中身」となり得るだろう。

特に新卒採用であれば就職後の OJT および Off-JT で話す中身を充実させるための教育・研修を受ける（→第4章）という側面があるものの、学生時代および社会人になってからも職場外の自己研鑽で能力を向上すべき部分もあるだろう。

4 翻訳 AI 時代は英語力が不要な時代か？

翻訳 AI (→第 12 章) がますます性能を上げている。例えば、英文契約を翻訳する際に、2024 年段階の翻訳 AI を通すと、細かく見れば「ちょっと違う」ところや、「翻訳せずに訳し落として」ところ等の「粗」が多々ある英語にはなるものの、ザックリと、どのような意味であるかを理解するには役に立つ。少なくとも 2040 年を見据えればいわゆる「小説の翻訳 (翻訳そのものもまた文学作品でなければならない)」や「オマージュ等のコンテキスト (背景) がある文章を日本の文脈に適切に移植して和訳する」等の特殊なものを除き、AI は人間と同程度の翻訳能力を持つだろう。そのような状況になれば、英語のスキルを習得することは不要となるのだろうか。

私は短期 (5 年程度) , 中期 (10 年程度) そして長期 (20 年程度) において、以下それぞれの理由で、少なくとも現在の大学生にとっては英語がなお重要であり続けると考える。

短期的には、AI の翻訳結果を、英語ができる人間が確認・検証しなければならないからである。AI 翻訳については、例えば原文に「no」と入っているのに、「no」が消された訳文が出てくる等の翻訳ミスが散見される。特に、「綺麗な翻訳」を作ってしまうがちであることから、訳文だけを見たのではその翻訳ミスがわかりにくいことが重大な問題である。例えば、なぜ上記の翻訳ミスが発生したのかというと、「no」が入ったために原文がおかしな文章になっているからこそ、「綺麗な訳文」とするために「no」

を AI 翻訳が除去したのかもしれない。そのような場合に、AI 翻訳のミスを発見するためには一定以上の英語力が必要である。

中期的には、リアルタイム性が問題となる。会話の「間」によって、たとえ「Yes」と口で言っているとしてもその意味が微妙に違う等、ニュアンスが変わってくる。AI 翻訳を通さず直接やり取りすることでリアルタイムにやり取りを行い、ニュアンスを含めた意思疎通を行うことができることの意味は大きい。

長期的には、英語ではなく、母語+翻訳 AI で対応する人も増えるだろう。その中で、あえて直接英語で話すことが、相手に対する尊重等、コミュニケーションにおける付加価値になる可能性がある。

ただ、このような点におけるマイナスがあることを承知の上で、英語はどうしても苦手なので AI に助けてもらった上で、それ以外の得意な部分で付加価値を産むという戦略自体はあり得るだろう（→第 4 章 Column）。

*本コラムは、本書と同様、西垣裕太さん（2024 年 4 月時点で司法修習生）にご助力いただいた。ここに感謝の意を表す。